

# 里山の縫製工場発 “和服なのに洋服に合う羽織”で新たな 市場を開拓

## 有限会社 縫夢ing

- 代表者名 代表取締役 岡本 新吾
- 所在地 〒709-4303 岡山県勝田郡勝央町豊久田2914-9
- 会社HP <https://wasouhoming.co.jp>

人里離れた里山にポツンとたたずむ縫製工場がある。縫夢ing（ホーミング）は、国産デニムで有名な児島・井原から少しばかり離れた岡山県の北部に位置する勝央町で1970年に創業した、従業員30名ほどの“和装専門”縫製工場だ。英語のHOMINGは「帰巢する」という意味をもち、「良い物を仕立て続けることで仕事はまた戻ってくる（帰巢する）」という想いが社名に込められている。また、「縫+夢+ing」という当て字には、「いつまでも立ち止まらず、なにか次の新しい縫製するものを現在進行形で夢見ていよう」という想いも込められているそうだ。創業時は薄いガーゼ生地を四枚縫い合わせる“四ッ縫い”という技法をもちいた“ガーゼ寝巻き”の縫製からスタート。当時はわずか2種類を仕立てるのみだったが、今では数多の商品を手掛けており、日本を代表する和装ブランドと取引するほどの縫製工場に成長している。

### 1. 「2.4%」という現実

縫夢ingの代表である岡本新吾氏によると、日本全体の衣料品流通数は年間約37億点といわれているなか、国内で縫製された服はわずか2.4%にしかすぎないそうだ。縫製工場にも高齢化の波が押し寄せ、30年で実に4分の1の会社が廃業を余儀なくされた。そして数年続いたコロナ禍による自粛ムードにともなう小売低迷の影響により、さらに多くの縫製工場が閉鎖し、

日本製衣料の発展に暗い影を落としている。特に和装においては、若者を中心とした着物離れも相まって状況は厳しくなる一方だ。そんななか縫夢ingは、和服を仕立てる人の「技術と知識」を、後世に残していきたいと日々奮闘。岡本氏は、和装の本分を知り具現化できる技術があるからこそ、着心地良く、着崩れしない、浴衣や着物を作ることができるかと自負している。その確固たるプライドと情熱で古き良き技術を守りながら、新しきを創造していくことで工場を稼働させ続け、国産の服を少しでも増やすべく、日々新たなことに挑戦し続けている。



創業時の様子

### 2. 小さな縫製工場のエシカルな挑戦

YOKIKOTO（よきこと）は、縫夢ingが2020年に立ち上げたオリジナルブランドだ。工場で作られ直送される、いわゆるファクトリーブランドともいえる。あまり知られていないが、本

来和装は生地を無駄にしない製造方法であり、「もったいない」という言葉を産んだ文化のなかの民族衣装である。和服は生地を四角く裁断して丸く縫製し仕立てていくため、ほとんどロスが出ないのだ。糸をほどいたらまた1反(40cm巾×120cm長)の生地に戻り、洗い張りをしてまた仕立て直す。世界中でSDGsが叫ばれるなか、和装は当たり前の基準でSDGsの世界に通用する日本の文化であり、その和装の利点をオリジナルブランドに活かした。「YOKIKOTOは数年で捨ててしまう衣装は作りません。お気に入り何年も長く楽しむことができるものづくりをしたいと考えています。使っていくうちにほころびや仕立て直しが起きてしまっても修繕しますので安心して長くお楽しみください」と岡本氏は語る。そう断言できるのが工場発ブランドの強みであり、技術力に確固たる自信をもった証である。1着の服を通じて、お客様・職人・工場がつながりコミュニケーションを取り続けることができるということは、単なる消費体験を超えた、人と人との交流であり、全員が幸せになれるサステナブルな取組みであることは間違いない。



工場とそこで働く職人

### 3. 和装の技術 × 洋装のデザインで次なるヒットをねらう!

YOKIKOTOの新作が「IRODORI」シリーズだ。令和4年度の岡山県商工会連合会主催「商品企画・開発・改良アドバイス会・ネットワーク構築会」プロジェクトを通じて出会った、有名小売店のバイヤーと中小機構の専門家がコンセプトやテーマづくりから伴走し1年がかりで商品化された。“これからの和服を担う洋服にも合う羽織コート”がコンセプトで、生地には兎島で織られた薄手のデニムを採用している。和装の会社がデニムを採用することも実に面白い、この柔軟性と感性が岡本氏の魅力でもある。生

地は綿のなかでも最高級品といわれるスーピマコットンを使用。触り心地はしっとりしており、カシミアにも匹敵するほどの肌触りの良さをもつといわれている。経年経過による色落ちも愉しめるデニム羽織だ。どんな洋服にも似合い、どんな小物との相性も良く、羽織紐で羽織風に、ベルトでコート風にもなるため、コーディネート幅が広がる。後ポケットに加え、左右にもポケットが付くなど、従来の羽織の概念を超えているこの商品は一見洋服のようだが、糸をほどくと1反の生地に戻るの、無論和服なのである。新作は2023年2月に実施された岡山県内の商談会や、東京で開催された中小機構主催「ヒットをねらえ! 地域のおすすめセレクション2023~ソーシャルグッドな逸品が集う展示会~」で展示され、想像を超える反応を得た。大阪梅田にある百貨店や、東京日本橋の百貨店等、数社と契約が決まり2023年の販売スケジュールも早々に埋まるなど、岡本氏も予想外の反応に驚きを隠せない。「作り手が見えない世の中ですが、私達縫製こそが形を作り、作り変えられる要です。生地も、産地も、ブランドも販売店も大事ですが、作り手の思いが伝わるのはこのYOKIKOTOの商品の良さです。どうぞその良さを気遣いなく愉しんでほしい。そんな思いも、商品と一緒に届いてくれたらと思います」と岡本氏は語っている。まだまだ岡本氏の挑戦は始まったばかりだ。YOKIKOTOを通じてさまざまな人に和装の魅力を伝え、日本の生産力向上の一助になるよう、今日も元気に勝央町のミシンは動き続けている。



独立行政法人 中小企業基盤整備機構  
経営支援部 中小企業アドバイザー(経営支援) 石塚 杏梨